20081

Door to Balloon Time 時間短縮に向けた検討～診療放射線技師として貢献できること～

【目的】平成 26 年度診療報酬改定によって急性心筋梗塞において緊急性を踏まえた評価の見直しが行われ、Door to Balloon Time(DBT)90 分以内が明確化された。そこで今回我々は、ビデオを用いた行動分析を行い、検査室準備における問題点を改善することにより、チーム医療の一員として診療放射線技師が目標達成に向けて貢献できるか検討を行ったので報告する。【方法】当院における DBT90 分達成割合(日勤帯、夜間帯)の調査を行った。次に経験年数や認定資格の有無における検査室準備時間の比較を行った。またビデオを用いてそれぞれの行動分析を行い、検査室準備における個人レベルでの問題点の抽出を行った。【結果・考察】当院においては日勤帯よりも夜間帯で DBT90 分達成割合が低い状況が認められた。これは、夜間帯はカテーテルチーム招集と検査室準備に時間を要するためと考えられた。また血管撮影の経験年数の違いにおいて検査室受入準備時間に違いが認められた。これは経験が浅い技師は、一つ一つの作業を順番に行っていたのに対し、経験者(血管撮影認定技師)においては複数の作業を同時に行っているためと行動分析より考えられた。さらに複数人で準備を行うことで、より時間短縮が行えると考えられた。【結論】DBT90 分以内達成には Door to Room(DTR)を短縮することが大切となる。DTR 短縮には、連絡体制・検査室受入準備を含めたカテ室全体の協力体制、チーム医療の向上にて短縮される。行動分析を用いて準備作業の効率化を図ることにより DTR の短縮に寄与することが示唆された。